

廃バッテリー 加工し輸出模索

韓国向けライセンス切れ

鉛リサイクル原料の販路模索と開拓をめぐる動きが活発化している。法改正によって韓国向けの廃バッテリー（使用済み自動車用鉛蓄電池）輸出のライセンス切れが相次ぎ、廃バッテリーの需給が緩みつつある中、集鉛に解体、もしくは中間原料の粗鉛（フリオ）に加工した販路が探られているようだ。貿易統計上では粗鉛とみられる輸出がすでに増えている。

解体し集鉛、粗鉛に加工

廃バッテリーは鉛リサイクルの主原料。近年は二次精錬業が盛んな韓国に大量流出し、国内での高値調達難と鉛リサイクル業界の空洞化が深刻化していたが、2017年に環境省の輸出承認審査が厳格化。1年期限の輸出ライセンス更新が事実

上ストップし、一次製錬・二次精錬メーカーの原料事情も改善されて買い上げ切れていないため、廃バッテリーが国内に滞留しつつある。集鉛はその廃バッテリーの電解液を抜いて、樹脂ケースから取り出した鉛極板の状態

のもの。電解液の処理施設を持つ鉛二次精錬工場の解体現場で発生するため、市中に流通するケースはまれだが、集荷業者が解体までを行い、受け入れ先を探しているようだ。「水面下で一部輸出する業者が複数いるようだ（市場関係者）」と具

体的な業者名までがささやかれている。集鉛を粗精錬して造られる粗鉛も、一次製錬メーカーが購入を抑制し始めた昨年未ごろから、需給バランスが緩んで市中相場が下落。（地金に対する単価の）掛け率は98%から95%くらいに下がった（粗鉛を供給する二次精錬メーカー関係者）と言われ、足元も

下値探りの展開が続いているようだ。



処理方法の模索が続く廃バッテリー

財務省の貿易統計によると、電気鉛を除く鉛塊（合金など）の輸出量は3月2536ト、4月635ト、5月822トと月を追って増加。増加分のうち約800トがそれまで輸出実績の乏しかったインドネシア向けで、二次精錬メーカーが拠点を置く港から積み出されているため、粗鉛輸出の新たな商流が築かれ

たと考えられる。また、廃バッテリー輸出においても韓国向けのほか、タイ向けに4月369ト、5月515トを計上している。輸出元のほとんどが大坂港。輸出平均単価はキロ200円以上と市価と隔絶しているため、通常の液入り廃バッテリーと形態が異なるとみられるが、輸出手続きの不透明さや数量的にも看過できない（前出の市場関係者）。

ライセンス切れが迫る韓国向けの廃バッテリー5月輸出は8377トと駆け込みで高水準だったが、国内では二次精錬メーカーに新規の売りオフアが相次ぐなど、荷余り現象が顕著になっている。廃バッテリーの市中相場は昨秋比約30%安のキロ80円台まで下落している。